

<調査結果のまとめ>

1 学力調査結果について

- (1) 小学校（小6）においては、大山町全体の平均正答率は、国や県と比較して「国語」はほぼ同等であり、「算数」は国や県を下回った。

特に「国語」では、学習指導要領の内容「思考力、判断力、表現力等」の記述問題（書くこと）においては、国や県の正答率を大きく上回った。日頃の授業で事実と感想、意見を区別して書いたり、自分の意見が相手へ伝わるように書いたりする指導が行われた成果である。昨年の全国学テの結果を受けた校内研究会・研修会等で授業改善の周知を図った成果でもあると考える。

「算数」では「思考力・判断力・表現力等」で課題が残る。特に桜の開花時期を折れ線グラフで読み取り、桜の開花予想日を求める式を選び、予想日を書く設問において、分析力に欠ける結果となった。実生活の様々な場面でのデータを活用し、言葉と数を用いた表現力や判断力を養いたい。

選択式、短答式、記述式の問題形式別でみると、小学校国語で記述式の正答率が国や県よりかなり高く、逆に算数では国や県より低い結果となっている。

- (2) 中学校（中3）においては、大山町全体の平均正答率は、国や県と比較して「国語」「数学」とも下回った。

「国語」では、小学校と同様で、学習指導要領の内容「思考力、判断力、表現力等」の記述問題（書くこと）においては、国や県の正答率を上回っている。また、今年は「情報の扱い方に関する事項」が低く、意見と根拠など情報と情報との関係についての理解が弱いことが見られる。引き続き、話し合い活動を取り入れ、相手の話を捉えて質問したり、聞き取ったことをもとに自分の考えをまとめたりする力をつけていきたい。

「数学」は、学習指導要領のすべての領域で低く、なかでも「数と式」において、最も低い正答率となっている。また、「思考力・判断力・表現力等」は県よりもやや高い結果となっている。特に文字を用いた式は、数量の関係や法則などを簡潔・明瞭に表現するためにも必要である。授業において文字を用いることのよさを実感し、その必要性や意味を理解できるようにさせたい。

- (3) 学校間の平均正答率の差については、小学校では、国語 11%、算数 17%となり、中学校では、国語 19%、数学 15%の差となっている。

領域別にみると、小学校国語では、「我が国の言語文化に関する事項」の領域で 33.3%、算数の「図形」の領域で 21.9%の差となっている。また、中学校国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域で 32.1%、数学の「数と式」の領域で 19.6%の差が生じている。

各学校が結果をしっかりと受け止め、分析し、日々の授業改善に取り組むとともに、「思考力・判断力・表現力等」の育成を意識した授業づくり・授業改善を推進していく必要がある。

また校区内で保育園を含めた小・中学校が今回の調査で見えてきた課題を共有し連携を強化し、学力向上に取り組むことが重要である。

2 質問紙調査結果について

- (1) 小学校においては、「英語の勉強は好きですか」の項目の肯定的回答割合が国や県より 10 ポイント以上上回っていた。児童の興味を引く教材の準備やわかりやすい親しみやすい英語の授業の取組の成果と考える。また一方で、「携帯電話・スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っていますか」「健康に過ごすために、授業で学習したことや保健室の先生などから教えられたことを、普段の生活に役立てていますか」などの項目は国や県より低かった。家の人も一人の大人として、約束事を守らせることにより、トラブルの回避や学力向上につながっていくことを理解していただきたい。
- (2) 中学校においては、国や県と比較して圧倒的に肯定的回答割合が高かったのは「理科の勉強は好きですか」の質問で、82.5% (県 69.3%) を占めていた。逆に最も低かった質問は「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる人にいつでも相談できますか」で、41.8% (県 71.5%) の結果であった。引き続き教師は生徒のよいところをしっかりと伝え、児童の自己肯定感を高めていく必要がある。また困ったことや不安なことがあれば、安心して相談できる教師と生徒の関係づくりを心掛けていくことが大切である。昨年少かった「地域や社会をよくするために何かしてみたいことはありますか」の肯定的回答割合は国や県より若干低いですが、昨年より 20% も上回っている。これも各学校が取り組んでいる地域への愛着を育むふるさとキャリア教育の推進の成果と考える。
- (3) 普段 (月～金) の携帯電話やスマートフォンを使っての SNS や動画視聴の時間を聞いたところ、「1 日 4 時間以上」は小学校が 21%、中学校が 14.3%、「1 日 3 時間以上 4 時間未満」が小学校では 10%、中学校は 5.5%、であった。これらの使用時間と各教科の平均正答率との関係も見てみると、使用時間が長いほど、正答率が低くなる傾向にあるが、特に差があったのは中学校数学で、使用が 4 時間以上の生徒と、1 時間より少ない生徒とでは 30 ポイントも差が出ている。ただ、学力との因果関係は定かではないが、「家族との使い方についての約束事」の項目も低かったので、改めて家庭内で正しい使い方の再確認が必要であると考えます。
「放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか (複数選択)」の質問で、小学校で多かった上位は「家でテレビや動画、ゲーム、SNS」89% (県 81.4%)、「家族と過ごしている」73% (県 65.2%)、「友達と遊んでいる」67% (県 65.8%) であった。中学校では上位から「家で勉強や読書」84.6% (県 78%)、「家でテレビや動画、ゲーム、SNS」81.3% (県 87.7%)、「家族と過ごしている」61.5% (県 67.6%) の結果であった。